

中年期男性の生活の送り方 — 老後生活の安定に向けて —

「中年期男性の生活の送り方に関する調査」 2016 年調査の結果報告

ごあいさつ

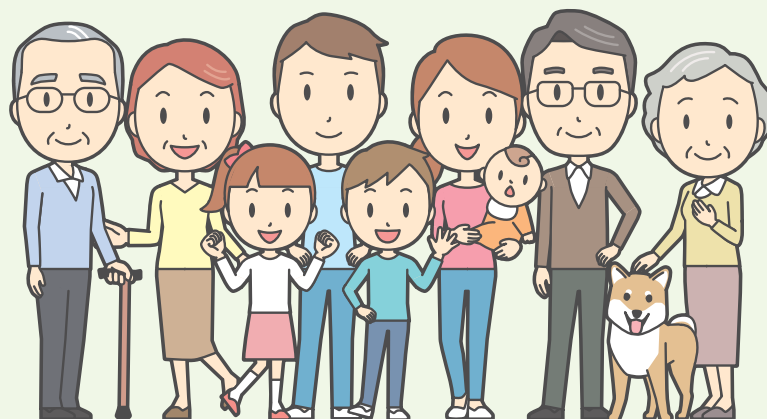
2016年に、全国の55～64歳の男性の方々を対象に、現在の生活の送り方に関する調査を行いました。中年期は家族や職場の中核を担うばかりではなく、自らの老後に向けての準備も始めなければいけない年代です。同時に、今の中年期の人たちは雇用延長、年金支給年齢の引き上げなど、人生設計の変更を迫られる大きな時代の変動の只中にも置かれています。この調査は、個人的にも社会的にも移行期にあたる人たちが、安心して老後生活を迎えるにはどのような対策が必要かを考えるために実施いたしました。

本調査の結果の詳細は、桜美林大学と本研究プロジェクトのWeb（注 参照）に掲載されておりますが、調査にご協力いただいた方々に、どのような結果が得られたのか、その一部を直接お伝えしたいと考え、冊子にまとめました。分析結果からは、現在の中年期の方々の職業生活、お勤めになっている企業の施策、健康習慣、さらに老後不安の状態が、1999年に実施した調査との比較によって明らかにされています。

本研究では、引き続き、老後の生活にうまく適応していくために何が必要かについて明らかにしていくための調査をしたいと考えております。今後とも私どもの研究にご理解・ご協力をいただくことができますと幸甚に存じます。

注) 掲載 web

https://www.obirin.ac.jp/info/year_2017/r11i8i000001i2i6-att/sugisawa_pro.pdf
<http://www.age-inequality.jp>



健康のための習慣はかなり普及

禁煙外来や敷地内禁煙など禁煙・分煙への取り組みが進んでいます。加えて、タバコの値段もかなり上がりました。では、現実の喫煙はどの程度変化したのでしょうか。今回の調査と1999年調査の結果を比較してみました（図1）。タバコを吸わない人の割合は、1999年調査では51%であったものの、今回の調査では65%と10ポイント以上増加しています。喫煙本数も、1日20本以上のヘビースモーカーは、1999年調査では全体の37%を占めていましたが、今回の調査では21%と約半減しています。

運動の頻度についてはどうでしょうか。月当たり0回、つまり運動をまったくしていない人の割合は、1999年調査では61%であったものが、今回の調査では51%に減少しております。他方、月10回以上という人は13%から20%へとほぼ倍増しています（図2）。中年期の男性の間では、健康志向が高まり、健康維持のための習慣がかなり普及していることがわかります。

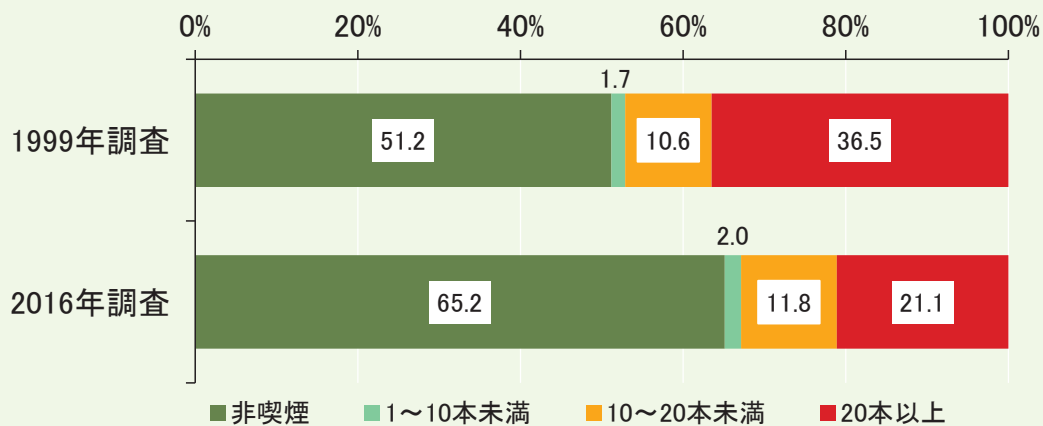


図1 中年者の1日当たりの喫煙本数

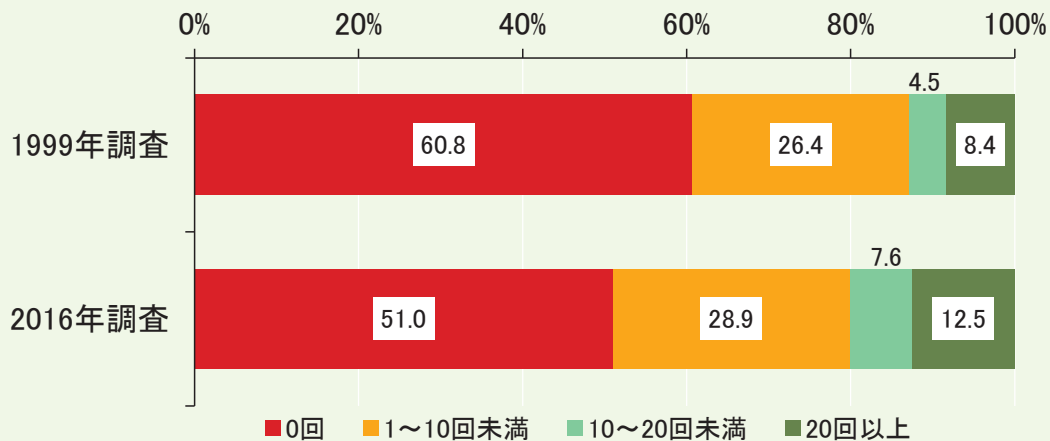


図2 中年者の月当たりの運動の回数

寝たきり、介護サービスに対する不安は高水準

我が国では2000年代に介護保険制度の導入や年金制度改革などの高齢者関連施策が相次いで導入されました。これらの施策によって老後不安に変化がみられたのでしょうか。1999年の調査と今回の調査の結果を比較すると、以下の点がわかりました。

「寝たきり等による家族や周囲への迷惑」をかける不安は70%程度と高い割合を示しており、この約15年間で大きく変化していません。「十分な介護サービスが受けられない」も50%程度の方が不安に感じており、大きな変化がありません。介護保険制度が導入されても、介護に関する不安の解消には結びついていないようです。「生活費が足りなくなること」や「社会との交流が少なくなること」への不安については、63%と49%で、1999年と比較し、それぞれ10ポイント程度増加しております。

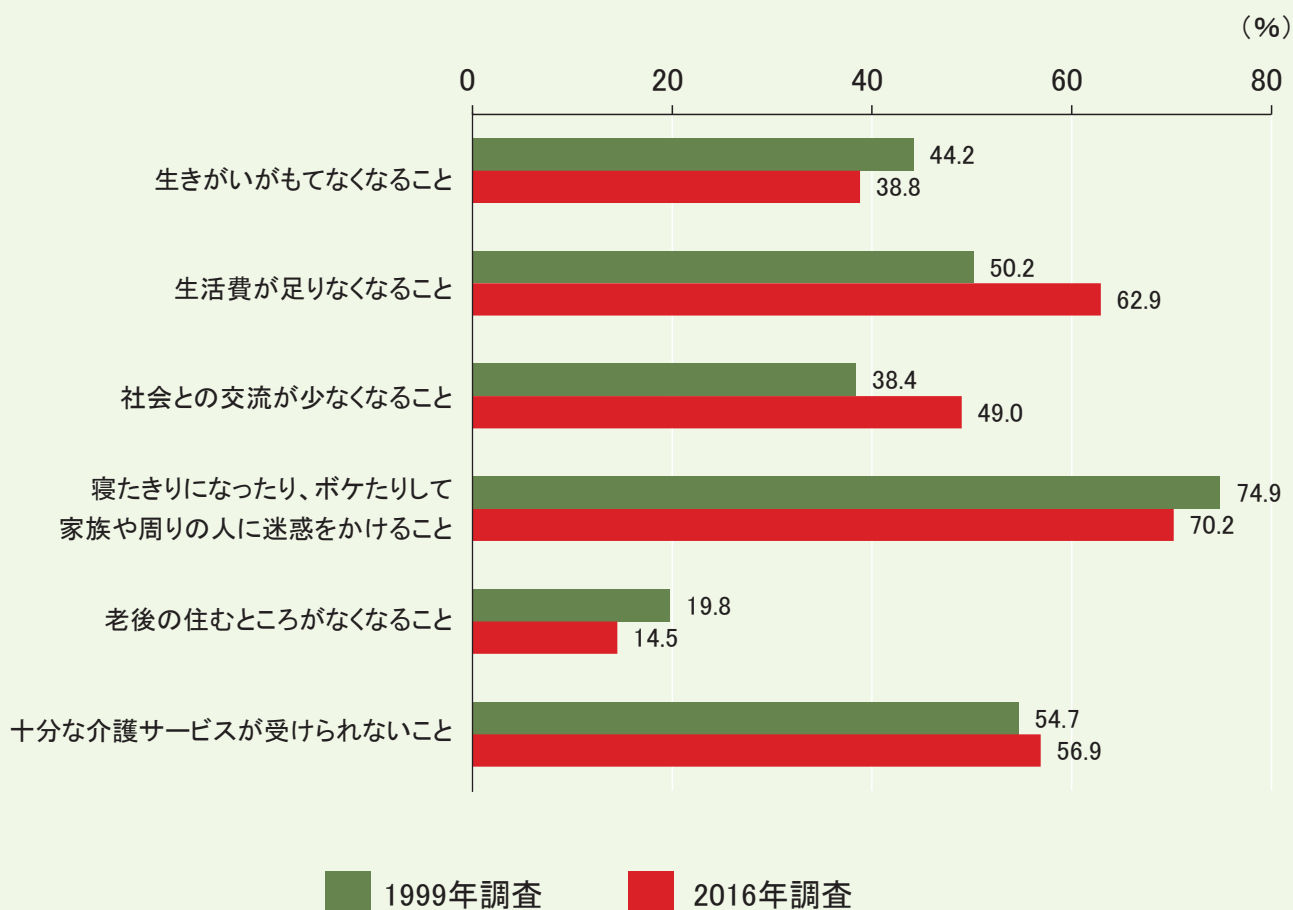


図3 老後の生活不安（「大いに不安」「まあまあ不安」の合計%）

中高年者にとって働きやすい環境の整備

定年の引き上げや継続雇用制度の導入などの法律改正が行われてきましたが、高齢になっても働き続けられる職場づくりに関する具体的な取り組みはどの程度進められているのでしょうか。今回の調査対象者の方々と同じ年齢層に調査した1999年の結果と比較してみると(図4)、いずれの項目でも利用可能な制度が「ある」という回答の割合が高くなっていました。「働きやすい労働時間の設定」や「作業設備や環境の改善」があるという人の割合は半数を超えています。一方、「退職後の生活設計の講座」や「健康・体力づくりの機会や場の提供」は30%程度にとどまっており、老後に向けての施策はまだ道半ばといえるでしょう。

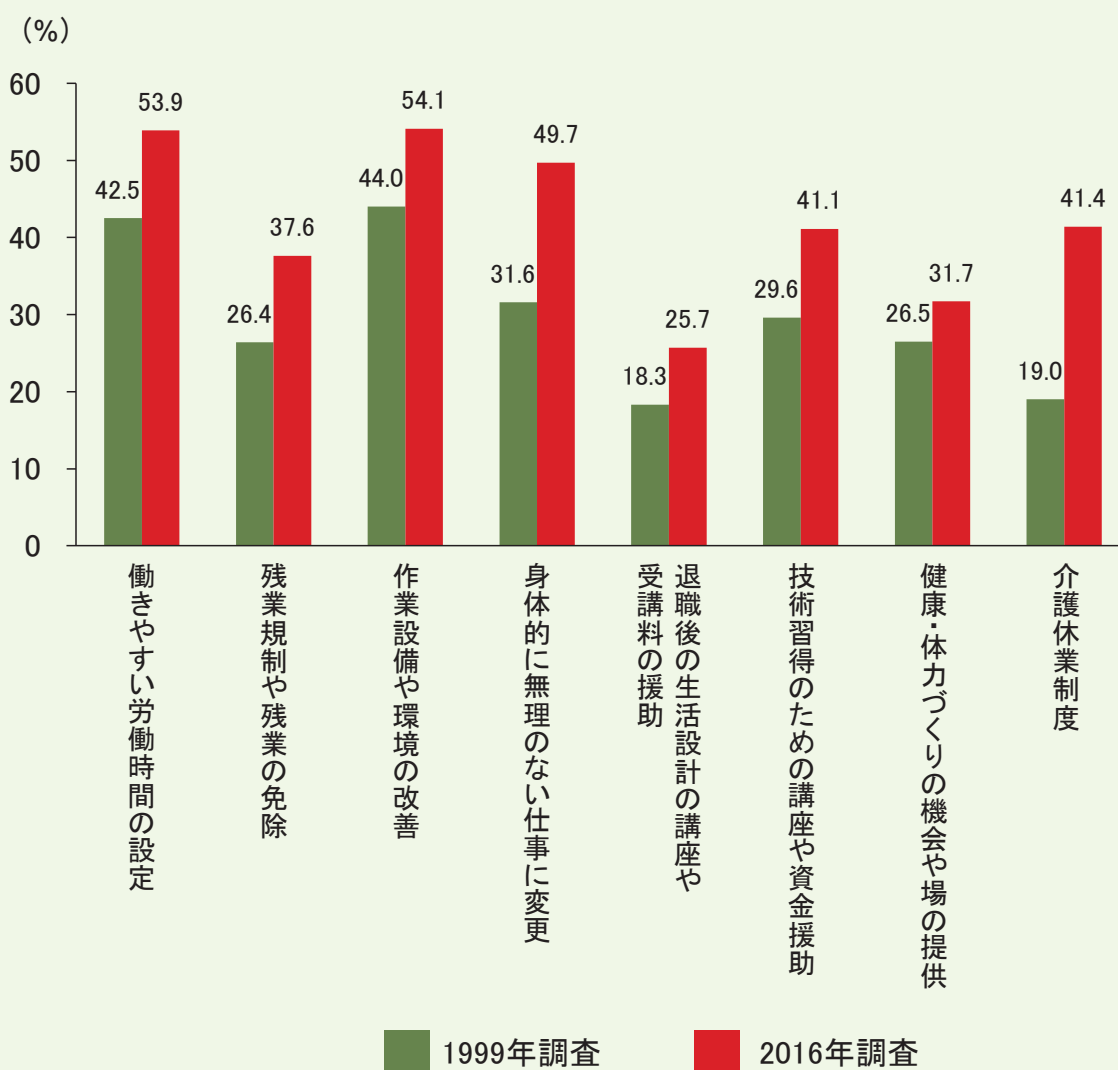


図4 会社や職場で中高年者が利用できる施策・制度（「ある」の％）

自分の能力を生かせる仕事についている割合が増加

職場環境として、「働きやすい労働時間の設定」や「作業設備や環境の改善」が進められてきておりますが、現実の仕事の特徴はどのように変化しているのでしょうか。仕事の特徴は、「新しいことを覚えたり、学んだりすることが求められる」「高いレベルの技術や知識を必要とする」などの専門性・先進性、「一生懸命働くことが必要だ」「あまりにも多すぎる仕事をこなすことが必要だ」などの繁忙性、「自分の得意なことをする機会がある」「以前の経験や教育・訓練で得た技能が使える」などの親和性などでみてみました。

以上の特徴が1999年と今回の調査でどのように変化しているか否かをみると(図5)、「新しいことを覚えたり、学んだりすることが求められる」などの専門性・先進性、「自分の得意なことをする機会がある」などの親和性に関する項目については、「とてもあてはまる」「まああてはまる」という肯定的な回答はいずれも、2016年調査では10ポイント程度増加し、60～70%の割合でした。「一生懸命働くことが必要だ」などの繁忙性については、30～40%で、1999年と2016年では大きな変化がみられておりません。親和性の高い仕事だけでなく、専門性・先進性といったことを求められる仕事につく中高年も増加していることがわかります。

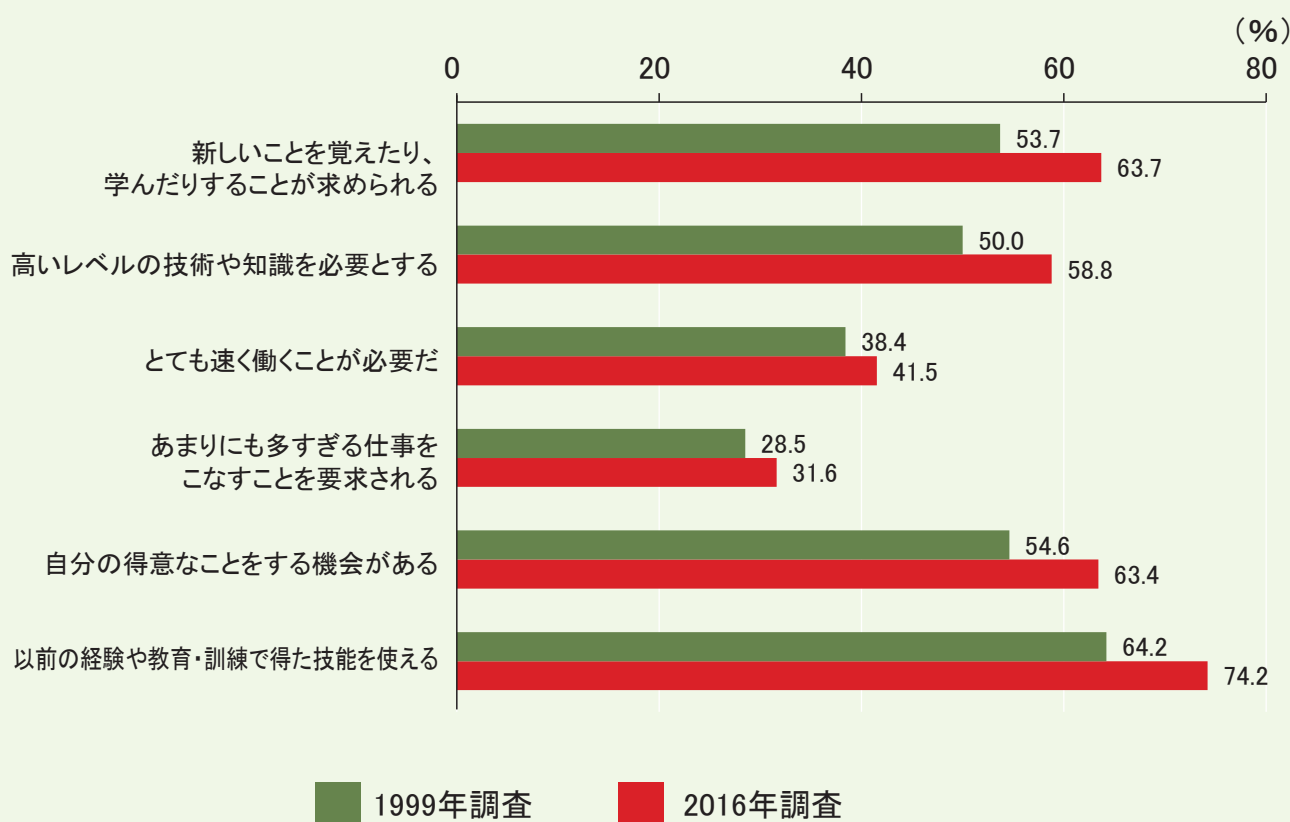


図5 仕事の特徴(「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計%)

仕事満足度はその内容によりかなりの格差

では、中年期の男性は、仕事にどの程度満足しているのでしょうか。今回の調査に基づき結果を紹介します。図6に示したように、仕事の満足度に関する全体的な評価では80%の人が満足と回答しております。しかし、領域別にみるとかなり差がみられております。「仕事内容」「人間関係」「能力活用」では70%以上の人が満足と回答しておりますが、「賃金」については40%程度の人しか満足しておりません。

さらに、全体満足度がどのような領域別の満足度によって影響されているかをみてみると、「仕事内容」が最も影響が強く、次いで「能力活用」「作業設備」となっています。満足度が低かった「賃金」については、「作業環境」よりも、全体満足度に与える影響は低くなっています。仕事満足度の全体的な向上を図るには、「仕事内容」「能力活用」など仕事の質的な側面を重視した改善が必要といえます。

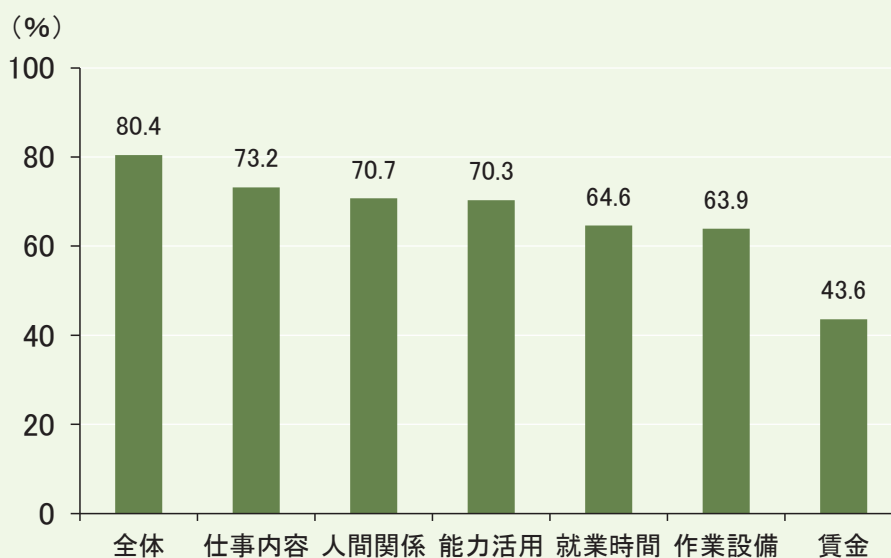


図6 仕事の満足度（「おおいに満足している」「まあまあ満足している」の合計%）

調査概要

- 対象●
住民基本台帳に基づき、全国の55～64歳の男性から層化無作為抽出法により2,500人を抽出
- 調査方法●
面接聴取法
- 回収状況●
完了数：919名
- 調査メンバー●
杉澤 秀博（桜美林大学大学院・老年学研究科・教授、代表）
原田 謙（実践女子大学・人間社会学部・教授）
杉原 陽子（首都大学東京大学院・都市環境科学研究科・准教授）
柳沢 志津子（徳島大学大学院・医歯薬学研究部・講師）
新名 正弥（未来工学研究所・研究センター・研究員）